

あの日のきらめきをカクテル・グラスに注いで

岸雨 三月

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ココア高校卒業から8年後のココチノの話。

チノちゃんお誕生日SSとしてpixiv小説に投稿したもののが転載です

目 次

あの日のきらめきをカクテル・グラスに注いで

あの日のきらめきをカクテル・グラスに注いで

「こんばんはー、ごめん、遅くなっちゃって。まだやつてるかな？ 一
人、入れる？」

「もう……本当に遅いですよ、ココアさん。予約してるんだから入れ
るに決まってるじゃないですか。早く入ってください」

他の飲食店と同じくここ「ラビットハウス」にとつても土曜の夜と
いうのは書き入れ時だ。とはいえ、さすがに日付が変わるまで1時間
を切る頃ともなるとお客様は少なくなる。今日は既に店内に誰も
いないので、この後はココアさんの貸し切り状態だ。私はこれ幸いと
「closed」の札を通りに向かつて掛けた。

「あれ？ お店閉めちゃって大丈夫なの？」

「大丈夫ですよ。ココアさんに心配してもらわなくとも、これでも一
日お店を休んでもびくともしないくらいには普段から稼いでるんで
すから」

そう言うと私はココアさんのコートをハンガーにかけ、カウンター
席に座るよう促す。

「じゃあ他のお客様には悪いけど、今日はチノちゃん独り占めにさ
せてもらおうかな」

「もう何言つてるんですか。私じゃなくて、私のお店、ですからね」
「相変わらずチノちゃんは私にツンツンだなあ……。それとしてもチ
ノちゃん、バーのマスターがだいぶ板についてきたんじゃない？ 昔
のチノちゃんを知つてると、夜のカウンターに馴染んでるチノちゃん
の姿つてなんだか新鮮」

「オーナーの娘としては昼のカフェタイムのことだけじゃなくて夜の
バータイムのことも分かつてないといけないですからね。修行ある
のみです」

「おっ、じゃあ修行の成果、見せてもらおうかな！ 明日は仕事もない
し、今日はお酒、飲んじやうよ！」

「はい、いつものノンアルコールカクテルです」

「つて早！ もう出でてきた！」

ココアさんが高校を卒業し、この街を出て行つてからもう7～8年になるだろうか。私もココアさんが出て行つた2年後には大学に通うために一度この街を出たが、今ではまたこの街に戻つてきてラビットハウスのカウンターに立つていて。とはいっても昔と違つてただ接客してコーヒーを淹れているだけでは済まない。将来お店を継ぐことを考えて経営や経理、仕入れ、設備の維持管理にバイトさんの労務管理や、夜のバータイムのことなども覚えていかなければならない。勉強を兼ねて週に何日かは、こうやつて私自身がマスターとしてバータイムのカウンターに立つているのだつた。それでもまだまだ未熟な私は父の力を頼らなければならぬ場面も多かつたが。

「今日は飲みたい気分だつたんだけどなあ」

「ココアさん、お酒弱いじゃないですか……。この前だつて酔いつぶれて終電逃してましたし。という訳で、今日はお酒禁止です」

私は指で小さくバツテンを作る。ココアさんは「えー」という顔をしてこう言つた。

「それを言つたらチノちゃんが昔からお酒弱いのに……。ねえ覚えてる？ シヤロちゃんの家でカレー・バー・ティした時のこと！ ウィスキーボンボンで酔つぱらつたチノちゃん、本当に可愛かつたなー！」

「い、いつたいいつの話ですか、そんな昔のこと覚えてませんよ」

「確かあの時はシヤロちゃんもカフェエインで酔つぱらつて歌い始めたんだつけ……。あの日のシヤロちゃん、完全にアイドルそのものだつたよね」

「違います、それは甘兎庵でカラオケ大会した時の話です」「ばつちり覚えてるじやん！」

思わず二人、顔を見合わせて笑つてしまふ。高校を卒業した後、私とココアさんは違う進路を選ぶことになり、この街で重なつた二人の人生は、やがて交差した二本の直線が遠ざかるように離れていった。それでもやつぱりこうやつて昔の思い出話に花を咲かせるのは楽しい。カウンター越しに顔を向かい合わせて話すと、ココアさんと暮らしたあの三年間の時間にタイムスリップしたような気分になる。

ココアさんが自分の進路について真面目に考え始めたのは高校三年の春、ちょうど私達が都会への旅行から帰ってきた頃だったようだ。旅行先での経験を経てココアさんも色々と思うところがあるたようだ。帰つてきた後に糸余曲折あつて「私、本気で国際弁護士を目指す！」と言い始めたのには驚いた。周囲も初めは冗談半分と捉えていたのだが、ココアさんは持ち前の行動力と、いつたいどこにそんな力が眠つていたんだろうという驚異的な集中力を發揮し、一年後には本当に海外の大学へ留学してしまつた。ココアさんが旅立つ日、見送りに行つた駅のホームで私は大泣きしてしまつた。そのことは今でもココアさんにからかわれる。当時の私にとつては海外留学などまるで別世界の出来事で、ココアさんが二度と帰らない旅に行つてしまふかのように思えたのだ。だがそんな留学もいつしか終わり、ココアさんは今ではこの国の大好きな街の弁護士事務所に勤めている。時々は木組みの街方面でのお仕事もあるようで、そんな時は必ずラビットハウスに顔を出してくれるのだった。

「で、うちのボス弁つたらさー。準備書面のここはこうしろ、ここはこうとか赤を入れてくるけれど、昔ならともかく今の世代の裁判官に対してそれは心証的にどうなの？って思うことも結構あるんだよねー。その割に肝心なところでは『君も弁護士なんだから自分で考えたまえ』だし……」

弁護士の仕事というのは、私には想像もつかないくらいハードなものなのだろう。ココアさんの明るく前向きな性格は今も昔も変わらなかつたが、こうやつて仕事の愚痴を聞くことも多くなつた。この街に帰つて来て仕事するようになつて、自分の力でお金を稼ぐことの大変さは人並みに分かるようになつたつもりだ。それでも私のような自営業者の大変さと、ココアさんのように責任の大きい仕事をしながら組織に属している人の大変さは根本的に違うものがあるようだ。あの頃のココアさんと私の間の話題は、学校のこと、友達のこと、街のこと、趣味のことなど、ほとんどがお互いに共通の認識のあることばかりだつた。正直今は、ココアさんのする話題は私にはよく分からぬ内容のものも多い。でもバーのマスターというのは職業柄、人

の話を聞くのが上手くなつていくものだ。ココアさんの話に分から
ないなりに相槌を打ち、ココアさんの話したい話を引き出していくこ
とは、半人前マスターの私でも出来ることだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「すー……、すー……」

ココアさんが店に来てから1時間ほど。ココアさんはカウンター
に突つ伏して眠りの世界に旅立つていた。ココアさんが「ねえ一杯だけ、一杯だけ飲んじやダメ?」と言うので、断り切れず一杯だけカク
テルを出してしまったら、その一杯でココアさんは撃沈してしまった
のだ。今日も到着が遅くなつたのは仕事が長引いたせいだと言つて
いたし、だいぶお疲れだったのかもしれない。

「ココアさん、起きなくていいんですか」

ココアさんはビジネスホテルのある近くの街で宿を取つてているよ
うなことを言つていたけど、この様子だと宿はキャンセルかもしね
い。本当にしようがないココアさんです、と私はつぶやく。今夜はこ
こに泊つて行つてもらうしかないだろう。部屋はココアさんが昔
使つていた部屋を使えばいい。ココアさんに着せるパジャマはちよ
うど良いものがあつたでしようか——、そんなことを考えながら、私
はちよつとだけわくわくし始めた。ココアさんと一つ屋根の下
で眠るなんていつ以来だろう。この気持ちは、初めてマヤさんとメグ
さんをお家に泊めた時の気持ちにちよつとだけ似てゐるかもしれない。
もつともその時のマヤさんメグさんはこんな風に酔いつぶれたりはしなかつたし、こんなに世話の焼けることもなかつたけれど。
眠つてゐるココアさんに肩を貸すようにして無理やり歩かせて上
階に連れていく。廊下で父とすれ違つたとき、父は少し驚くような表
情をしたもの、すぐに事情を察して優しく微笑み、ココアさんに階
段を上らせるのを手伝つてくれた。かつては精悍だつた父も年齢に
は勝てないのか、頬には皺が増え、髪には白いものがだんだんと混ざ
り始めて來てゐる。でも父の微笑む顔は年々、おじいちゃんのそれに
似てきているような気がする。

ココアさんの部屋はココアさんが出て行つた時そのままにしてある。

幸いちょうど昨日掃除をしたばかりだったので部屋は綺麗だ。ココアさんが出て行つた後の部屋は、ココアさんの溜め込んでいた私物——だいたいはプロカントやこの街のお店で買い込んだ雑貨類だったが、それは同時に私たちとの思い出の詰まつたものでもあつた——が撤去された分、ずいぶんと寂しく見えた。でも今は、かつての部屋の主が戻つてきたことで、まるで部屋自体が喜び、華やぎを取り戻しているようにも見えた。

とりあえずココアさんをベッドに寝かせる。仕事からそのまま直行してきたココアさんはぴつちりしたスーツを着ている。このままではスーツに皺ができてしまうかもしない。さすがに眠つたまま着替えさせることは出来ないので、一度起きてもらわないと。でもどうすれば目覚めるでしょうか——ベッドの前で私は考え込む。

「……お姉ちゃんの、寝ぼすけ」

何とはなしにそんな言葉をつぶやいていた。そういえば昔の私は、「お姉ちゃん」と呼ぶと普段は何をしても目覚めないココアさんが一発で起きるので、この言葉をずいぶん便利に使つていたような気がする。これで何度もココアさんの遅刻を防いだことか。なので今も無意識に「お姉ちゃん」と言つてしまつたが、ダークスーツに身を包んだ現在のココアさんは目覚めることなく眠り続けるのだつた。

「……

昔の私は「お姉ちゃん」という言葉を魔法の言葉のように思つていた。だが、魔法というのは期間限定メニューのようなものだつたのかもしれない。ココアさんの寝顔を眺めながらそんなことを思う。今考えると、寝ていても「お姉ちゃん」という言葉にだけ反応するだなんて、ちょっと漫画じみてバカバカしいような話だ。昔のあれも、もしかしたらココアさん流のジョークだつたのかも——、そんなことを思いながら、毛布だけでも取つてこようと部屋を出ようとしたその時だつた。

「むにゃ……チノちゃん……」

「ココアさん?」

寝言かと思ったが、ココアさんははつきりと目覚めていた。まぶた

は半開きでとても眠そうではあつたけど。「着替えだけでも……」そう言いかけた私をジエスチャーで制して、ココアさんはこんなことを言い始めた。

「来月はチノちゃんのお誕生日だよね。チノちゃんのお誕生日パーティー、みんなを集めてしようよ。また昔みたいにさ」「えつ？」

「リゼちゃん、シャロちゃん、千夜ちゃん、メグちゃんに、街の外に出たマヤちゃんも呼んで、あともちろんナツメちゃんエルちゃんにフュちゃんも……」

「ちよつ、待つてください、私もうそんなに盛大に誕生日を祝われるような歳では」

そこまで言つたところでココアさんはバタン！　とまたベッドに倒れこんで眠つてしまつた。いつたい何だつたのだろう。お酒に酔つた勢いで訳の分からないことを言つてているのだろうか。確かに昔は、何かというと理由をつけてみんなで集まつていた。誰かの誕生日もそうだし、音楽会、文化祭にハロウインにクリスマスなどなど――でも今はみんなそれぞれに仕事も持つていて、それぞれの生活がある。マヤさんなんかフイールドワークだなんだといつて年がら年中世界中を飛び回つている。何よりココアさん自身が一番忙しいはずだ。みんなの予定を合わせて集まつて誕生日パーティーをするなんて本当に出来るんだろうか。

「すう……」

でも、と思う。ココアさんの寝顔を見ていると、不思議とココアさんなら実現してしまうかもしれない、と思うのだった。だってココアさんはまるで魔法使いみたいに、みんなが夢見た以上の光景を現実のものにしてきた人だから。たぶん一人ではできなくて、「チノちゃん手伝つてー！」と良い歳して私やみんなに助けを求めてきそうではあるけれど。「しようがないわね」「やれやれ」と言つた顔をしながらも何だかんだ手を貸してくれるシャロさんやリゼさんの姿や、人一倍ノリノリで色んな企画を提案していく千夜さんの姿が目に浮かぶ。

私とココアさんの間には、大人になつて共通の話題は少なくなつた

けれど、逆に大人になつてから発見した共通点もあつた。二人とも、お酒を飲んでどんなに酔つ払つても記憶は残るタイプだつたのだ。今言つた誕生日パーティーのことだつて、きっとただの冗談ではなく本気の本音として酔いが覚めても覚えているだろう。

「おやすみなさい、ココアさん。誕生日パーティー、楽しみにしてますからね」

ココアさんに毛布をかけながらそう言つて私は部屋を後にした。

次の誕生日で私も25歳になる。二十代の前半は終わり、いわゆるアラサーという年齢に突入だ。私の人生で一番きらめいていた時期は終わりつつあるのかもしれない。でも、ココアさんと過ごした木組みの街での三年間は、解けない魔法のように私の記憶の中に残り、私の心を今も暖め続けている。ちょうど、真つすぐに交わる交差点から遠く離れて振り返つても、まだその交差点を遠くに眺めることが出来るように。そして私もココアさんも、距離は離れても心まで離れ離れるになつてしまつた訳ではない。あの日々のきらめいた記憶を持ち続ける限り、私たちはまたここで会うことが出来るし、その記憶を灯火のようにしてそれぞれの道を前に進むことが出来るのだろう。

たとえその道が、この先二度と交わることがないものであつたとしても。